

羽仁もと子の教育思想における「自由」

——「宗教心」との関係に着目して——

相 田 ま り

研究室紀要 第43号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2017年7月

羽仁もと子の教育思想における「自由」

——「宗教心」との関係に着目して——

相 田 ま り

はじめに

本稿は、羽仁もと子(1873-1957)の教育思想における「自由」概念の特色を、とりわけ「宗教心」との関係において明らかにすることを目的とする。

羽仁もと子(以下、もと子と略す)¹⁾は大正新教育の潮流の中で1921(大正10)年に自由学園を創立し、「真の自由人をつくりだすこと」を目指して独自の実践を展開した。もと子によれば、「真の自由人」とは「神の造りたまいまいに、神の力と人の力で生活しつつ育ちつつある」人のことである。ここでいう「人の力」とは、「自分自身の力を主とし本として、必要な部分に段々どこまでも他人の力を受け入れるところの、広い意味での人力」である²⁾。つまり、主体的かつ協同的なあり方を指しており、今日教育によって育むことが求められている「生きる力」などと理念を共有しているものと考えられる³⁾。だが、注目すべきは、もと子がこの「人の力」に加えて「神の力」が必要であると考えたことである。もと子は、神の存在を感じる心のことを「宗教心」と呼ぶが、それは、特定の宗派や宗教に対する信仰を意味するものではない。もと子は敬虔なキリスト者であり、自由学園においてもキリスト教の精神に基づく教育理念を掲げたが、「宗教の詰込みは実に恐ろしいこと」であるとして、キリスト教を教えることには慎重であった⁴⁾。

先行研究では、もと子の掲げる「自由」の背景にキリスト教思想があることが指摘されているが⁵⁾、「宗教心」との関係についての踏み込んだ検討はなされていない。もと子のキリスト教思想を総括的に分析した李の研究(2009)においても、自由学園創立当初もと子が特定の宗教を教えることに慎重な姿勢を見せていたことは指摘されているが⁶⁾、「宗教心」の内実については言及されていない。李は、もと子の宗教教育に対する当初の姿勢が戦時下において揺らぎ、「戦争や政府の方針を聖書に基づいて正当化

し、これを[……]学生の頭の中に注入しようと」するようになったと述べている⁷⁾。そして、もと子の「自由」論においては「何が正しい権威か、何が使命であるかについて自主的に考えて、その真偽を定める権利、またはそのための努力が必要であることが十分に認識されていない」と指摘する⁸⁾。しかし、もと子が自由学園において試みたのは、まさに、自らの従うべき権威を見出す心や頭を養うための教育であった。そうであるとすれば、「自由」を「宗教心」との関係から捉えた上で、それらの取り組みがどれだけ子どもの自主的な思考や感性を尊重していたかを問うべきである。しかし、「自由」を「宗教心」との関係から論じた研究は管見の限り存在しない。

以上のことを踏まえて本稿では、もと子の教育思想が確立された1930年代初めまでのもと子のテキストに基づいて、「自由」を「宗教心」との関係から読み解いてゆくこととする。というのも、李も指摘しているように、もと子は1930年に著作集第15巻『信仰篇』を著してキリスト教思想を確立し、その2年後の1932年にはニースで開催された新教育連盟の国際会議において自由学園での教育について講演し、教育思想を確立しているからである。もと子は『婦人之友』において、育児に関する実践的な知識から、子どもの理想的な生活習慣、学校での勉強や予習復習の仕方といったテーマを取り上げてゆく中で、独自の教育思想を確立していった。特に、子どもの生活に「宗教心」がなければならぬことは当初から述べられており、1903年の同誌の創刊から1932年のニースにおける講演まで、「自由」を掲げる教育における「宗教心」の重要性についての考えは一貫している⁹⁾。

なお、本稿の構成は以下の通りである。第1節では、もと子の教育思想の中心概念となる「自由」について、もと子の当時の教育に対する批判などに照らしながら検討する。続いて第2節では、もと子の「自由」の根底にある「宗教心」について検討し、な

ぜ「自由」は「宗教心」に支えられていなければならぬのかを明らかにする。最後に第3節では、「自由」を根幹とするもと子の教育思想から導き出される課題として、「自由」と「権威」との関係について検討する。

1. 羽仁もと子における「自由」

(1) 詰め込み教育と子ども中心主義の教育に対する批判

もと子の教育の原点には、詰め込み教育に対する批判がある。もと子は自らの学校経験や長女の小学校での経験などを通じて、教科書に書かれた内容を覚え込ませるだけの形式的な教育に対して不満を募らせていた。もと子は1925年の論文の中で、詰め込み教育は子どもの「自分の頭の本当の活動を犠牲にして」、子どもの感性や思考を育てる代わりに知識を多く覚えることに対する「名誉心や競争心」を植えつけると述べている。そして、このような教育を受けた子どもたちは、自分の意志で生きることができず、誰かに指示されないと何もできなかつたり、人の話を丸呑みにしたりするような人間になってしまうとして、詰め込み教育を糾弾している¹⁰⁾。

その一方で、もと子は、子ども中心主義の教育にも異を唱えた。もと子は1922年の論文の中で、子どもの得意なことに特化してその才能を伸ばそうとする取り組みに対し、それは幼いうちに子どもの可能性を見限ってしまう「浅薄な天才教育」、「誤った自由教育思想」であると批判した¹¹⁾。また、1928年の論文では、子どもの欲望や個性を無批判に肯定し、わがままを黙認したり、「何でも彼でも気楽に行成り次第に」させたりすることに対して、それは「自然に任せるところか、大いなる不自然主義である」と指摘した¹²⁾。

(2) 「ほんとうの自由主義の教育」とは何か

もと子は、詰め込み教育と子ども中心主義の教育を批判して、「ほんとうの自由主義の教育」¹³⁾を実現することを目指した。

子ども自身の感性や思考を尊重しなければならないというもと子の主張の根本には、人として生きる以上、自己を重んじ、積極的に生きなければならないという考えがあった。自己を重んじて積極的に生きるとは、自己の内にある「願いや欲望」に基づい

て行動するということである。当時は一般的に、女性には夫や子どもに対して、また子どもは大人に対して従順であることが美德とされていたが、もと子は『婦人之友』の読者にも自由学園の生徒にも、終始一貫して自己を重んじて生きることを求めた。もと子は1915年の論文において、願いや欲望こそ成長の原動力であるとして次のように述べている。

「子供から大人まで、我々の心の中にある願い、それほど大切なものはありません。むしろ人そのものが願いだといってもよいのです。[……]その願いや欲望をよく取り扱ってやりさえすれば、ひとりでのよい人も立派な人も出来る。反対にその取扱い方が悪い時に、つまらない人も不幸な人も出来るのだということを、よくよく心に入れて置きたいものです」¹⁴⁾。

このように、もと子は、一人一人の「心の中にある」「願いや欲望」の扱い次第で、その人の人生が変わると考えていた。自己の内にある様々な願いや欲望を吟味し、「よくない願いや、くだらない欲望」を手放し、「正当な^{おが}願望」を伸ばしてその実現へと向かわせる。「自分の要求や欲望が、果たして正当なものかどうか、自分がしたいと思ったことは、ほんとうに自分に興味のあることであるかないかを、実際に経験する機会」を与えることで、自己の内なる要求に基づきながら積極的に「よいこと」を実現してゆく人間を育てる。もと子はこれを「欲望の教育」と呼んだ¹⁵⁾。

子どもが自分の中に色々な願いや欲望があることを自覚した上で、それらの善し悪しを判断し、実現へと向かわせる。その際に注意しなければならないのは、既存の道徳や社会規範を押しつけるのではなく、子ども自身に考え判断させることである。もと子は1928年にまとめた文章の中で、次のように述べている。

「教育というものは、お行儀や規則のことを、まず厳しくしては、決して出来っこはないものです。[……]自発的によい規律をつくり、守り、自然に礼節に叶いつつある子供であるように教育すべきです」¹⁶⁾。

形式や決まりごとに盲目的に従わせるのではなく、

子どもが自ら考えて「自発的によい規律をつくり」守らせること、その結果として「自然に礼節に叶いつつある」ことが重要である。もと子は、大人が子どもに規則や規範を押しつけるべきでないことを強調し、子ども自身が試行錯誤を繰り返しながら、何が正しいのかを自然と理解できるようになるよう導いてやるべきであると述べた。

また、もと子は、よいことを実現する過程で他者との協力関係を築くことも重視した。よいことを実現するためには、本人の努力と工夫だけでなく、他者の協力も必要である。もと子は同じ頃に書いた文章の中で、子どもに「自分たちの思いの実行には多くの人と協力の必要〔であること〕を痛感させることが必要であると述べている¹⁷⁾。それは、単に足りないものを補ってもらえばかりでなく、一人では発揮できない力を引き出してもらったり、他者の視点を得ることによって新たな発見があったりといった可能性を開くことでもあった。自分の要求を自覚し、それを実現するために何が必要なのかを考え、周囲の人と関わりながら進むべき道を選択する。そうした試行錯誤を繰り返すことによって、子どもは「自ら教育する」人に育てゆく¹⁸⁾。もと子は以上のように述べて、子どもが自らの願いや欲望を実現する過程で、他者との関係を築きながら成長してゆくことを望んだのであった。

(3) 子どもの「人格」と「自由」

以上に述べたように、もと子の求める自由とは、自己の内なる要求に基づき、他者の助けを得ながらよいことを実現することであった。こうした意味での自由を掲げる教育の根本には、子どもの「人格」と「自由」がある。もと子は「すべての子供各々の生の中に、よい人になる種子のかくさされていることを信じ、その人格を重んじて、愛深き大胆さを以て、私たちの手から子供を解放しなくてはなりません」と述べて、子どもの「人格」を重んじることを教育の第一の条件としている。大人の思惑を子どもに押しつけることは「彼等の人格に対する冒瀆」であるとして、もと子は次のように述べている¹⁹⁾。

「子供たちを自分の手のものと思わず、対等の人格として、彼等の絶対的自由を認めてこそ、私たちが子供の成長のためにする苦心と努力は、本当に唯愛による真実な奉仕になります。

親や教師の心がここまでに至った時にこそ、子供は自からめいめいの人格の重大なる責任を感じて、自由なるが故に謙虚なる態度を以て、多くの誘惑と過ちから最も強く自身を護ることが出来るようになるのだと思います」²⁰⁾。

私たちは子どもの成長を願って多くの「苦心と努力」をするが、それらは、子どもと「対等の人格として」接し、「彼らの絶対的自由を認めてこそ」、大人のエゴでなく「ほんとうに唯愛による真実な奉仕」となる。したがって教育において最も重要なのは、子どもの人格と自由を尊重することである。しかし、すでに明らかのように、それは何でも子どもの好きなようにさせることではない。子どもの人格と自由を尊重するのは、子ども自身に「めいめいの人格の重大なる責任」を自覚させるためである。

子どもに自身の人格に対する責任を自覚させるといふ発想は、もと子のキリスト教思想に基づいている。もと子は1914年の論文の中で、次のように説明している。

「どのような場合にも、他を侵すことを疾しく思い、他より侵されることを、何よりも許しがたく思うのは、私共人間の本能でございます。造物主は私共に、飢餓の感覚を与えて、肉の命を全うせしめ給うように、精神的には以上の本能を与えて、個々の独立を全うせしめ給うのでありましょう。[…]子のためも夫のためも、親のためも、人のためも、趣味も思想も、犠牲も献身も、皆悉く私共の独立したる人格の基礎の上にのみ立ち得るのだと思います」²¹⁾。

人間の精神には「どのような場合にも、他を侵すことを疾しく思い、他より侵されることを、何よりも許しがたく思う」感覚が備わっている。すべての思いや行動は、独立した人格を持つ人間としての自覚の上に立って、はじめて生きたものになる。つまり、人間の思いや行動はすべて、各人の自由な意志によって選び取られるべきものであるということである。

もと子はさらに1930年の論文の中で、自由は消費されるだけでなく生産されるべきものであると述べている。もと子によれば、個々人の自由は「神の恩恵の贈りもの」であり、「唯一の真の富」である。自由

は神から与えられたものであり、それをもとに誰かが増やして分け与えてくれたものである。したがって、最初に与えられた貨幣を元手に資産を増やしてゆくように、自由もまた各人の能力を用いながら増やしてゆくべきものである²²⁾。

「私に与えられている自由、それをよく使わして頂きましょう。[…]私に与えられているタラント [=貨幣] を用いて、自分の生きるためにも、他人の生きる助けのためにも、このなくてはならない自由を、また根限り生産しましょう」²³⁾。

もと子は以上のように述べて、人間は自らの意志によって、与えられた能力を生かしながら自由を増やし、他者に分け与え、他者と協力しながらさらに増やしてゆく使命を負っているとの考えを示した。

各人が能力を生かし他者と協力しながら自由を増やしてゆく。それは、人間を成長させるばかりでなく、神の意志を実現することにも繋がっていた。もと子は同年にまとめた著作集第15巻『信仰篇』の中で、人間は神によって「造られたもの」であり、人として正しく生きるためには、この造り主である神の意志を知り、それにかなうように行動を選択してゆくことが必要であると述べている²⁴⁾。なぜ神の意志にかなうことが求められるのか。その理由は、1917年に書かれた次の文章の中に示されている。

「自主自由の人というのはその身体や精神の最も気持よく働く人です。[…]自分の欲望のままにでなく、自然の法則をたずねて、それに叶うように生活することが、すなわちわれらの自由を得るためであり、心の思いにしても、造化の人間に望み給うところに従って生きること、それがすなわちわれわれに自主自由の快感を自覚させるところの健康な精神になるのだと思います」²⁵⁾。

ここに、人間にとっての自由とは「造化の人間に望み給うところに従って生きること」であるという、もと子の自由概念の核心が示されている。人間は「その身体や精神の最も気持よく働く」ときに自由を感じる。それは「自然の法則をたずねて、それに叶うように生活する」ときに得られる。つまり、神の意

志にかなうことは、自由を実現するための最も重要な条件なのである。そして、もと子は次のように続ける。

「かくしてわれわれの心身が活発に動いていれば、そこにおのずから進歩があります。そうしてだんだんと知恵や力が進んでゆくと、私たちの働く範囲も広くなり、知らずしらずの間に幸福に有益な生涯を送ってゆくことが出来ます。そうしてわれわれの幸福である生き甲斐があると感ずる生活は、すなわち造化のわれわれを生み給える目的に叶い、そのみ心を成す生涯なのです」²⁶⁾。

ここから、もと子にとっての自由が神から人間に与えられた使命でもあることが読み取れる。神の意志に従って生きるときに、人間の心や身体が活発に働き、そこから「進歩」が生まれる。それが人間にとっての「幸福」であり「生き甲斐」である。それは、人間にとっての自由であると同時に「造化のわれわれを生み給える目的」である。1922年の論文にも書かれているように、「私たちは神の意志を成さんがために生きつつある」のである²⁷⁾。つまり、もと子の求めるほんとうの自由とは、自己を重んじつつ、他者と協力しながら進歩すること、それによって神から与えられた使命を果たすことなのであった。

以上のことから、もと子の求める自由には三つの要素があることが理解される。すなわち、子ども自身の要求に基づくこと、他者と協同しながら進歩すること、神の意志にかなうことである。しかし、神とは目に見えないものであり、その意志を直接聞くことはできない。では、どうしたら神の意志を知ることができるのだろうか。この点を明らかにするために、次節ではもと子の自由を支える「宗教心」について検討する。

2. 「自由」を支える「宗教心」

(1) 羽仁もと子の人間観

前節の最後で、もと子の求める自由が神と関係していることが明らかになった。なぜ自由を実現するためには神の存在を考慮しなければならないのだろうか。以下では、もと子の人間観に触れながらこの

点を明らかにしてゆく。

先述したように、もと子にとって、一人一人の人間は神から人格を与えられた、絶対的に独立した存在であった。しかし、人間を超越した完全なる存在である神と違って、人間は不完全な存在である。もと子によれば、この不完全さが人間に悲しみをもたらしている。1920年の論文の中で、もと子は次のように述べている。

「私たちはもっともっと自分を愛したい、もっともっと親を愛したい、子を愛したい、夫を愛したい、友達を愛したい、私たちの家も庭も家畜ももっと愛したい、ありとあらゆるすべてのものを愛したいのです。しかし我ながら愛想の尽きるような自分を度々見ている私たちは、思う存分に自分を愛することが出来ないのです。そういう自分と、またやはり不十分な親や子や夫や友達と相対しつつある間に、心から愛して見たい心持は妨げられがちであります。その外ありとあらゆるものに対して、私たちの理解の不十分さとそのものの中にあるいろいろの故障のために、しんから愛して見たい心持が満足されずにいるのです」²⁸⁾。

私たちは、自己や他者を愛したいという気持ちを持っている。しかし、人にはそれぞれ能力の限界や欠点がある。周囲の状況や様々な要因によって努力を妨げられることもある。そのような中で「我ながら愛想の尽きるような自分」や「不十分な親や子や夫や友だち」に相対すると、自分や相手を愛したい気持ちは「妨げられ」てしまう。能力や欠点を人の存在価値と結びつけるような規範や価値観が、不完全な自分を責め、同じく不完全な相手を否定させるからである。

また、それぞれに独立した人格を与えられた人間は、「一人ぼっち」の寂しさと隣り合わせで生きている。これについてもと子は、1918年の論文の中で次のように述べている。もと子によれば、多くの人は考え方の異なる人と一緒にいることはできない、自己を犠牲にしなければ相手とつき合うことはできないと考えている。しかし、こうした考えが私たちに一人ぼっちの寂しさをもたらす。なぜなら、各人に与えられた自由は絶対的なものであり、どんなに愛しく思っている相手も自分の思い通りにすること

はできないからである。そうして孤独を感じるようになると、人々は生気を失い、深く自己を見つめて努力することを放棄し、やけになって一時的な享楽に耽ったり、目先の欲望や虚栄心に囚われたりしてしまう²⁹⁾。もと子は以上のように、人間の抱える悲しみや孤独が、人がそれぞれに独立した人格として生きつつ他者と関係を築くことを阻んでいると考えていた。

(2) 神と人との繋がり

こうした悲しみや孤独を乗り越えるために、もと子は「宗教心」を育てることが必要であると考えた。宗教心を育てるとは、根本的には、人間が神から独立の人格を与えられていることを認識させるということである。1926年の論文の中で、もと子は次のように述べている。

私たちは、神から一人一人に独立の人格を与えられている。神の下に人はみな平等で、それぞれが絶対的に尊い存在である。こうした認識に至ることができないと、自己と他者を混同して、自分のうまくいかないことを他人のせいにしたり、相手が自分の思い通りにならないことを嘆いたりするようになる。また、相手より自分が正しい（自分より相手が悪い）、相手より自分の方が能力が高い（自分より相手の方が劣っている）ということになり、人はみなばらばらだという認識のまま、他者との競争を続けることになる。こうして人間同士の比較に囚われているうちに、考え方の異なる人とはつき合えないと考えたり、能力を人の存在価値と結びつけたりするような考えが生まれてくる³⁰⁾。

こうした他者との比較から抜け出すために、もと子は、人間を超えた絶対的な基準となる神の存在を考慮に入れる必要があると考えた。もと子は1927年の講演において、以下のように述べている。

「お互いに不行届きな薄志弱行なわれわれは、親子でも夫婦でも自分自身でも、お互いに愛想のつきることばかりです。その互いの罪と不行届きを悲しんで、本気に救われることを希いつつ、共に祈るもの同士であることが分かってくれば、敵をすら愛したい心になり、さらにその祈りを聞くもののあることが分かってくれば、私たちの生に本当の望みと大いなる価値が感ぜられて来るものです。すなわち私どもは神を信

ずることによってのみ自身を信じ、また人を信ずることが出来、愛なき行ないをするのは浅はかな我であり、愛なしと人を見るのも同じように浅はかな自分であることが分かって来ます」³¹⁾。

私たちは自分の至らなさや意志の弱さに呆れ果てながらも、どうかして進んでゆきたいと希望を捨てずに願っている。私たちは「共に祈るもの同士」である。このことに思い至ることができると、相手に対する「同情」が生まれ、同時に自分を受け入れることができるようになる³²⁾。まさに「神を信ずることによってのみ自身を信じ、また人を信ずることが出来るのである。そうして神を信じ、自己と他者を信じられるようになると、相手と比べて自分を卑下したり、傲慢になったり、あるいは他者を恐れたり見下したりすることが愚かなことであるとわかってくる。もと子はこのように、神との関係を見出すことが、私たちに既存の思考の枠組みを乗り越えさせ、自他の存在そのものの価値を認め信頼関係を築くことを可能にするのだと考えた。つまり、他者との比較に囚われずに自分の進むべき道を見定め、他者と協力しながら進歩してゆくために、神という超越的な存在との関係を考慮に入れることが必要だったのである。

(3) 「宗教心」とは何か

以上のように、もと子にとって神とは、自他の存在そのものを受け入れ、信頼関係を築くための端緒を開くものであった。もと子は、この神の存在を感じる心のことを「宗教心」と呼んだ。

もと子は1925年の論文の中で、人間の心には「形あるものを通して、形のないものを知ろうとする」「内部なる心の要求」があると述べている³³⁾。宗教心とは、この要求のことである。それは、「我々の上に働いている」「人間以上の意志や感情」を感じ、探究しようとする心のことであり³⁴⁾、できる保証はないが、できると信じて一步を踏み出す勇気を与えてくれるものである³⁵⁾。

もと子によれば、人間は生まれたばかりの頃は、ただ本能のみによって何かを求めて生きている。すると、「何かは知らず求めているものは、一々応えられて、そこに私たちの生活が出来て」ゆく。そうして成長するにつれて意志が育ってくると、自らの自

由な意志によって何かを求めるようになる。するとまた、「その要求に応えようとしている大いなる力」に助けられて、一つずつ要求が満たされてゆく。もと子は、このような力が確かに存在していることを感じ、それを神と呼んだ³⁶⁾。

「私たちの肉の生命を育ててくれる大いなる力は、自分自身の力の外に、また別に存在しなければならぬことを、認識しない訳に行かない我々は、その肉の生いのちに全く続いて出来てくる私たちの心の生いのちも、またその同じ力に見守られていることを否定することが出来ないはずです。私たちの身体からだとそして心を見守ってくれるもの、[...]それが即ちわれらの天父なのです」³⁷⁾。

ここに示されているように、もと子において神とは、人間の生命を育み、その成長に必要なものを与えてくれるもの、自らの意志によって生きようとする人間の要求に応じてくれる力のことを指していた³⁸⁾。

もと子は、このような意味での神を信じる心である宗教心を、キリスト教や仏教といった特定の宗教に対する信仰から区別し、すべての人の心に共通するものであると主張した。もと子は自由学園の創立に当たってその方針を示した文書の中で、次のように述べている。

「私は洗礼をうけて教会に行くものは神を信ずる者で、他の人は神と没交渉だと思ったり、仏教と基督教とは仇同士のように考えたりすることの出来ないものです。[...]私はすべての人の心々に神を愛したいと思う力の深く秘められてあるのが、人間の自然だと思っています。この心をはぐくみ育てるために、人間のすべての生活があるのだと思っています」³⁹⁾。

ここに書かれているように、もと子は、信仰において形式的な儀式や行為を重視する考えを退けるとともに、信じる宗派や宗教が異なっても、決してそれらが対立するものではないとの考えを持っていた。個々の宗教の違いよりも、それらに共通する「神を愛したいと思う力」に着目したのである。

もと子は1932年の論文の中で、「仏教信者の子供が、キリスト教信者になった時、ブルジョアの子供

が、マルキシストになった時、忍び難い愛情はありながら、勘当する義絶する」のは人間が主義の「奴隷」になっているからだとして述べている⁴⁰⁾。また、日蓮宗を信仰する知人の「私たちは日蓮宗ではなく、日蓮主義です」、「主義の下に人間が生きるということは間違いです」という言葉を引きながら、次のように述べている。

「人は主義の下に生きるものでなく、主義によって結ばれる以上に、愛によって結びつけられ、どういう時でも、愛に生き、愛に死ななくてはならないものです。[...] 性格が違って、友としての懐かしみをすてないようにと心して交わる時に、相互の長所がかえって生きて来るように、愛をすてずに異主義者を見守るならば、互いに他山の石となるばかりでなく、また必ずその尊敬すべき点を発見することが出来るものです」⁴¹⁾。

上記の引用には、個々の宗教に対する信仰は主義の一つであり、異なる主義を持っている者同士でも、より深いところで、つまり「愛」によって関係づけられるという考えが示されている。このように、もと子にとって神を信じるとは、個々の主義の違いを超えたところにある愛によって他者と結びつけられることを意味していた。そして、もと子は次のように続ける。

「愛の最も大いなる所以、愛の慕わしき所以は、すべてのものが、悉くその中で成長するからです。唯その中でのみすべてのものが成就するからです。主義をすてて立場をすてて、はじめてあり得る愛というものはありません」⁴²⁾。

愛によって結ばれた関係がその土台にあるからこそ、個々の主義や思想や信仰が育ち、その特色を生かすことができる。主義思想は人間の一部であり、すべての人はそれよりも深いところにある愛によって繋がることのできる。それを可能にするのが神を信じる心、すなわち宗教心である。

人間はそれぞれに独立の人格を与えられているが、神の下に生きているという事実は、すべての人に共有されている。すべての人間は、神の意志によって支配されているこの世界の中に、言い換えれば、

神と人との、そして人と人との繋がりの中に生きているのである。私たちは、神との関係を認識することによって、この事実をすべての人と共有していることに気づく。そうすることによって、主義や思想や信仰といった個々の価値観の違いを超えて、愛によって繋がることのできるようになる。神とは「主義よりも更に大切なもの」、つまり「愛」なのである⁴³⁾。そして、すべてを包摂する愛に基づく関係の中に生きているという安心感があるからこそ、互いの違いを認め、学び合うこともできる。宗教心とはつまり、神との繋がりを認識することによって、人と人とを愛によって関係づけ、協力して進歩するという自由の土台となるものなのであった。

以上、宗教心について検討した。端的にいうと、宗教心とは、もと子の求める自由を支える愛に基づく関係を可能にするものであった。人は神との繋がりに気づくことによって、他者との競争から抜け出し、ありのままの自己と他者を受け入れられるようになる。また、宗教心はあらゆる価値観の違いを超えてすべての人に共通するものであり、人々を愛によって関係づけるものであった。

3. 羽仁もと子の「自由」における愛と協力について

ここまで、もと子の求める自由の特色と、それを支える宗教心の内実について明らかにしてきた。もと子の求める自由とは、価値観の違いを超えた愛によって結ばれた関係を土台に、独立した一人の人間として意志や能力を発揮しながら生きると同時に、他者と協力しながらよいことを実現し、進歩してゆくことであった。それは、一人一人の人間に独立の人格を与えた神との関係を見出すことによって可能になるものであった。

先述したように、もと子は、各人の意志は絶対に自由であるとして、教育において子どもの自由な意志を尊重することを第一条件とした。しかし、自由を根幹とするもと子の教育思想において疑問に感じることがある。それは、自由の先には向かわせるべき一つの目標があると述べていることである。各人の自由と統一的な目標とは、どのような関係にあるのだろうか。以下では、もと子の思想が変化してゆく1933年以降の文章にも触れながら、自由と権威と

の関係に焦点を当てて、もと子の教育思想に内在する課題を提示したい。

(1) 「自由」を成り立たせる「権威」

第1節で述べたように、もと子は子どもの欲望をただ解放すればよいという考えに反対し、自らの従うべき対象を見出し、それに従うことこそ自由であると主張した。その対象とは、すべての人間に独立の人格を与えた神であった。もと子は1932年に行われた座談会の中で、自由は権威があってこそ成り立つものであるとして次のように述べている。

「教育の根本は宗教だと思っています。即ち神に対するローヤルテイダと思うのです。自由教育に統一がないというのも、その中に権威がないからです。一国の中にも団体の中にも中心点〔となる権威〕がなかったら、そこにたとえどんな自由があたえられていても値打がなくなります」⁴⁴⁾。

ここで述べられているように、もと子にとって自由とは、権威に裏づけられていてこそ価値あるものであった。それは、これまで見てきたように、ただ好き勝手に振舞うのではなく、自分の頭で考えて正しいと思うことを見出し、それに従って行動するとき、与えられた能力を最大限に発揮することができるという考えに基づいていた。自由にはそれを裏づける権威が伴っていなければならないという考えは、戦争が近づくにつれて段々とその重要度を増してゆく。もと子は「自由の社会には権威が必要です」⁴⁵⁾、「権威のない自由は無力です」⁴⁶⁾などと述べて、自由における権威の重要性を説く。そして、終戦後の1946年に行われた座談会では、次のように述べている。

「正しい権威のある所、そうしてそれを認識しうる所のみ真の自由はあり得ると思っています。たとえば一つの学校という団体の場合にも、その学校がどうありたいか、その目的とするところに権威があるわけです」⁴⁷⁾。

ここには、「真の自由」は「正しい権威」のあるところのみ存在するという考えが明示されている。その権威とは、個人や団体としての「目的」、「どうあ

りたいか」という目標である。もと子は1937年に行われた第7回世界新教育会議での講演においても、「どういう場合にも、人間は必ず一方に目標と統一と、そうして他方に囚われない自由をもって進んでゆかなくてはならない」と述べている⁴⁸⁾。ここでは、従うべき権威を見出すために自由に考え行動することよりも、統一的な目標が前提とされ、その目的を達成するための手段として、各人の自由な方法による努力が尊重されているように見える。こうした考えが、戦時下において愛国心や家族国家思想と重ねられるようになり、『婦人友』の読者や自由学園の生徒たちに戦争協力を要請するような発言へと結びついていったと推察される。

(2) 「愛と協力の世界」を目指して

前節で述べたように、もと子の求める自由は、宗教心があることで可能になるものであった。宗教心とは、人々をあらゆる価値観を超えた愛によって結びつけるものであり、よいことを実現しようとする人を支える基盤となるものである。もと子はこれについて、1932年の論文の中で次のように述べている。

「よいことを本気になってするのは、おほれかけている人を見てわれを忘れて一緒に飛び込むような心境だと私は思っている。頭腦のよさばかりでは決して出来ないことである。[...]われわれの日常に起こるいろいろな場合に、奮い立つ心——それは単なる義侠心のみでは出来ない。良心というよりももっと深いところにある霊性の力だと私はそれを思っている」⁴⁹⁾。

周りの人に何といわれようと、自分の正しいと思うことをする。そのために必要なのは、論理的な思考力や義務感ではなく「奮い立つ心」である。もと子はそれを、「子供が虎に攫われた時、それを奪い返そうと駆けよる母の強い力」にも喩えている⁵⁰⁾。こうした行動を可能にするのが宗教心なのであるが、もと子においてこれは、真理を希求する心として理解されていた。その真理とは、互に愛し合いたいという願いのことである。もと子は1934年に行われた座談会の中で、個人にとっても集団にとっても真理は同じであり、いつの時代も人はみな「皆扶け皆愛して、本当のよい社会をつくりたいという希い」を抱いていると述べている。そして、「犠牲を払っても、本気

になってみなの方が真理を求めなくてはならない」と主張している⁵¹⁾。

各人の思想や行為は絶対に自由なものであるから、意見の合わない人がいても、相手の意見を頭ごなしに否定したり、自分の意見を押しついたりしてはならない。しかし、すべての人は一つの真理を共有している。だからこそ、各人がありのままに意見を表明し、互いに聞き合い学び合うところから進歩が生まれる。戦争の気配が近づいてくる中で、もと子は、すべての人が対等な人間として「人間同士の大きな親しみ」⁵²⁾を持ちながら「何にも拘束されず自由自在に所信を語り得る」⁵³⁾ような社会の実現を目指していた。

この人間同士の大きな親しみとは、性格が優しいとか気が合うといったことではなく、「我々は絶対の意味においては、唯神のみを愛し、[...]神を愛する故に、その愛したもう人を愛せざるを得ず」⁵⁴⁾という心のことである。それは、「○○だから好き」、「○○だから嫌い」といった価値判断を超えている。もと子は、このような愛によって結ばれた関係を土台に、互いに協力し学び合いながら「愛と協力の世界」⁵⁵⁾を実現しようとした。そのために自由学園をつくり、団体として進歩することを試みた。しかし、先に述べた「おぼれかけている人を見てわれを忘れて一緒に飛び込むような心境」とは、「一人で行動するよりも大きな成果が得られるから協力しよう」、「自分とは違う考えを持った人とも関わり学び合うべきだ」といった価値判断を含むものではない。前者は価値判断抜きに瞬間的に人を突き動かすような力であり、後者は「○○すべきである」という判断によって起こす行動である。前者を「愛」、後者を「協力して進歩すること」とするならば、後者の前提には確かに前者がある。両者は連続的なものである。しかし、連続的ではあるが、区別されるものである。もと子は、価値観の違いを超えて愛によって繋がり、その関係を土台に、他者と協力しながらよいことを実現することを自由と呼んだ。しかし、それを団体として実体化してしまうと、価値観を超えた繋がりよりも、価値観を共有する人々の間での方法の自由という意味に縮減されてしまうという問題がある。

もと子には、愛と協力の世界を実現するという究極的な目標があった。もと子は個々人の自由を尊重する一方で、最終的に一つの方向に向かうことを願っていたのである。各人が正しいと信じる対象を

見出し、それに従って生きること。もと子にとってその対象とは、あらゆる価値観を超越した神であり、向かう先は愛を基盤とする社会であった。だが、戦時下において、個人の自由よりも集団としての目的を優先するような発言が見られるようになってゆく。集団としての目的に向かうことが前提とされ、個々人の自由な意志によって選び取るという余地が奪われてしまった。究極的な目標を達成するためには多少の犠牲も厭わないという立場を取るとき、目の前で溺れかけている人は見捨てられてしまう可能性がある。しかしそれは、能力の優劣で人を評価するのは別の、もっと深いところで他者と繋がるようにしたもと子自身の愛の思想と矛盾するのではないだろうか。

おわりに

以上、本稿では、羽仁もと子の教育思想における自由概念の特色と、それを支える宗教心の内実を明らかにした。最後にまとめと今後の課題を示して本稿を閉じたい。

第1節では、もと子の教育思想の中心概念である自由について検討した。もと子の教育思想の原点には、詰め込み教育と子ども中心主義の教育に対する批判があった。もと子の求める自由とは、自己の内なる要求に基づき、他者と協力しながらよいことを実現することであった。それは、人間の成長を導くとともに、神から与えられた使命を果たすことでもあった。これを受けて第2節では、もと子の自由の根底にある宗教心について論じた。もと子は、人間という存在の根底にある悲しみや孤独を乗り越えるために、宗教心を育てることが必要であると考えた。宗教心とは、神と人との繋がりを認識させ、人と人とが個々の価値観を超えて愛によって繋がることを可能にするものであり、これまでの価値観を揺るがすようなできごとに直面したときに一歩を踏み出す勇気を与えてくれるものであった。最後に第3節では、自由と権威の関係に焦点を当てて、もと子の教育思想から導き出される課題を提示した。もと子の求める自由とは、愛による繋がりを土台に、自己を生かしつつ、他者と協力しながら進歩することであった。それは、愛の関係を可能にする宗教心によって支えられていた。それはいってみれば、個人としての自由と、他者と繋がることで得られる自由を同

時に実現することである。しかし、戦時下において、各人の自由よりも集団（団体）としての目的を優先するような発言が見られるようになっていった。あらゆる人間関係の土台となる愛が抜け落ち、自由が、愛と協力の世界を実現するという目的のための手段と化してしまっただけであった。

今後の課題として、次の三点を挙げる。一点目は、宗教心についての検討を深めることである。もと子は個々の宗教に対する信仰をマルクス主義や資本主義といった主義のうちの一つと見なしているが、宗教をこのような位置づけで捉えてよいのだろうか。また、そうだとすると、もと子のいう宗教心とは本当にキリスト教の枠に囚われない普遍的なものなのか、慎重に論じる必要がある。二点目は、もと子の家族概念についての検討である。紙幅の関係上本稿では取り上げることができなかったが、もと子は自由を実現するための団体を家族と重ねて理解していた。しかし、家族という血縁に基づく情緒的で親密な関係と、統一的な目標に向かって進歩する団体とは、本来性質の異なるもののはずである。自由を掲げて進歩する団体と家族とを同一視してしまっただけなのか。家族主義を強調してゆく戦時下における思想とも関連させながら、この点について追究してみたい。そして三点目は、自由学園における実践について検討することである。本稿で述べた自由と宗教心をめぐる思想が、実際の教育にどのように反映されていたのか。実践記録や卒業生による手記なども参照しながらこの点について検討し、現代の教育における課題について論じる際の手掛かりとしたい。

＜参考文献＞

引用に際しては、旧字体を新字体に、旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。なお、引用文中での〔 〕で括られた部分は筆者による補足である。

◆羽仁もと子および関係者による著作

- 羽仁もと子（1983-2011）『新版 羽仁もと子著作集』（全21巻）、婦人之友社。
『家庭之友』（1903.4-1908.12）、内外出版協会。
『婦人之友』（1908- ）、婦人之友社。
羽仁吉一・羽仁もと子（1991）『自由人をつくる—南沢講話集—』、自由学園出版局。
羽仁吉一（2007）『新版 雑司ヶ谷短信』（上下）、婦人之友

社。

- 羽仁説子（1963）『私の受けた家庭教育—羽仁もと子の思出一—』、婦人之友社。
羽仁恵子（1972）『自由学園の教育』、自由学園出版局。
——（1990）『南沢だより—羽仁もと子の思想を生きつつ—』、婦人之友社。
婦人之友社建業百周年記念刊行委員会編（2003）『羽仁吉一・もと子と語る座談集 真理によって歩む道』（上下）、婦人之友社。

◆羽仁もと子研究

- 岩間 浩（2012）『羽仁もと子・自由学園と新教育運動』『教育新世界』37巻1号、33-48頁。
牛木純江（2013）『セツルメントにおける人間形成—東北農村生活合理化運動に注目して—』木村元編『近代日本の人間形成と学校—その系譜をたどる—』、クレス出版、204-226頁。
鶴丹谷三千代（1980）『羽仁もと子その生い立ちと思想形成』『生活学園短期大学紀要』3号、93-109頁。
奥田暁子（1995）『キリスト者の戦争責任—羽仁もと子の思想と行動—』奥田暁子編『女性と宗教の近代史』、三一書房、13-44頁。
太田孝子（1999）『自由学園北京生活学校の教育—日中戦時下の教育活動—』『岐阜大学留学生センター紀要』創刊号、3-19頁。
小田三千子（2011）『羽仁もと子と教育—宗教教育のことなど—』『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』29号、55-70頁。
斉藤道子（1988）『羽仁もと子—生涯と思想—』、ドメス出版。
鈴木博雄（1999）『羽仁もと子の家庭教育思想の現代的意義—福沢諭吉との対比において—』『日本教材文化研究財団研究紀要』29号、68-71頁。
武田清子（1985）『羽仁もと子の思想と生活“合理化”—「自由」の意味は？—』『婦人解放の道標—日本思想史にみるその系譜—』、ドメス出版、105-141頁。
立川正世（1988）『羽仁もと子の教育思想』『名古屋大学教育学部紀要 教育学科』35号、61-73頁。
中嶋みさき（2003）『自由学園・「自労自治」の教育とジェンダー—羽仁もと子の「生活」概念をてがかりに—』橋本紀子・逸見勝亮編『ジェンダーと教育の歴史』、川島書店、101-266頁。
西村絢子（1973）『羽仁もと子の教育論—女子教育観と生活主義教育の系譜について—』『教育学研究』40巻3号、54-62頁。

林 美帆 (2011)「羽仁もと子論：もう一つの近代家族論」、奈良女子大学博士論文。

馬場結子 (2015)「羽仁もと子の家庭教育に関する一考察：母親の生き方と子どもの生活を中心に」『淑徳短期大学研究紀要』54号、81-93頁。

深田未来生 (1974)「思想と信仰の接点—羽仁もと子の教育論—」『基督教研究』38号、180-198頁。

福原 充 (2013)「キリスト教社会事業と羽仁夫妻の理想の社会—1930年代初頭における『婦人之友』を中心に—」『キリスト教教育研究』31巻、47-66頁。

葛井義憲 (2015)「羽仁もと子、平和の使者」『名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇』51巻2号、1-10頁。

古屋安雄 (2003)「羽仁もと子とキリスト教—巖本善治・植村正久・高倉徳太郎・羽仁もと子—」『日本のキリスト教』、教文館、113-161頁。

むらき数子 (2004)「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ—生活現場での主婦たちの戦い—」岡野幸江ほか編『女たちの戦争責任』、東京堂出版、64-75頁。

森田登代子 (2013)「『婦人之友』と友の会活動—キリスト教的〈文化活動の一形態—」上村敏文・笠谷和比古編『日本の近代化とプロテスタンティズム』、教文館、212-248頁。

李 垠庚 (2009)「羽仁もと子の思想・生活・戦争：近代日本女性キリスト者とその時代」、東京大学博士論文。

王 娟 (2010)「自由学園北京生活学校の設立について」『鶴山論叢』、1-19頁。

◆大正新教育、宗教教育など

今井康雄 (1998)『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想—メディアのなかの教育—』、世織書房。

宇野美恵子 (1990)「教育の復権—大正自由主義教育と自己超越の契機—」、国際書院。

大井令雄 (1984)『日本の「新教育」思想—野口援太郎を中心に—』、勤草書房。

キリスト教学校教育同盟編 (1977)『日本キリスト教教育史・人物篇』、創文社。

—— (1993)『日本キリスト教教育史・思潮篇』、創文社。

小山静子 (1999)『家庭の生成と女性の国民化』、勤草書房。

田中智志・橋本美保編 (2015)『大正新教育の思想—生命の躍動—』、東信堂。

中内敏夫 (1973)『近代日本教育思想史』、国土社。

中野 光 (1977)『大正デモクラシーと教育』、新評論。

—— (2008)『学校改革の史的原像』、黎明書房。

成田龍一 (2007)『大正デモクラシー シリーズ日本近現代史④』、岩波書店。

堀尾輝久 (1987)『天皇制国家と教育—近代日本教育思想史研究—』、青木書店。

堀松武一 (1987)『大正自由主義教育の研究—千葉命吉を中心に—』、理想社。

<注>

- 1) 羽仁もと子は日本で最初の女性新聞記者となった人物で、結婚を機に報知新聞社を退社し、1903 (明治36) 年に夫・吉一 (1880-1955) とともに雑誌『婦人之友』の前身である『家庭之友』を創刊した。もと子はそこで、自らの結婚生活に即しながら、家庭生活の合理化や、読書や交際による自己修養など、家庭を中心とした女性の生き方を説いた。また、長女の誕生以降は、自身の経験に基づきながら育児・教育に関する記事を書いていった。
- 2) 羽仁もと子「教育の目的は何ぞ」『婦人之友』1947年10月号、婦人之友社、1頁。
- 3) 文部科学省「学校・家庭・地域が力をあわせ、社会全体で、子どもたちの「生きる力」をはぐくむために—新学習指導要領スタート—」(平成22年8月) <<http://www.city.iwata.shizuoka.jp/school/toyoda-minamichu/syokuinsitu/ikirutikara.pdf>>2017年3月29日最終アクセス。
- 4) 「それ自身一つの社会として生き成長しそして働きかけつつある学校」『婦人之友』1932年10月号、43頁。
- 5) 岩間 (2012)、42頁。
- 6) 李 (2009)、172-173頁。
- 7) 同上論文、227頁。
- 8) 同上論文、255頁。
- 9) 李はもと子の思想について、キリスト教思想と教育観の確立、1932年の世界旅行での体験という個人的な側面と、15年戦争への突入という外部的な環境の変化を考慮して、1930年代前半を一つの区切りとしている(同上論文、12頁)。1930年にキリスト教思想のまとめとして著作集第15巻『信仰篇』を著し、1932年に教育観の集大成としての講演を行った後、もと子にはわかには愛国主義の色合いを強めてゆく(同上論文、174頁)。『婦人之友』においても、1933年4月号の「座談会 家族・民族及び人類を語る」を皮切りに、愛国心や民族、家族主義などを取り上げた記事が増えている。
- 10) 「詰込教育と自由主義の教育」『婦人之友』1925年2月号、5頁。
- 11) 「非天才、非凡才」『婦人之友』1922年2月号、2-7頁。

- 12) 「放任主義と不注意主義」『新版 羽仁もと子著作集』
(以下、著作集)第10巻『家庭教育篇 上』、1928年、42-43
頁。
- 13) 「詰込教育と自由主義の教育」、4頁。
- 14) 「欲望の教育」著作集第11巻『家庭教育篇 下』、1929年
(初出は1915年)、85頁。
- 15) 同上論文、85-94頁。
- 16) 「二種の学校」著作集第10巻、271頁。
- 17) 「家庭の常識と学校の常識」著作集第11巻、執筆は1927
年、300頁。
- 18) 同上論文、297頁。
- 19) 「詰込教育と自由主義の教育」、6頁。
- 20) 同上。
- 21) 「人生と自由」『婦人之友』1914年11月号、4-5頁。
- 22) 「『自由』の生産と消費」『婦人之友』1930年9月号、17-21
頁。
- 23) 同上論文、18-19頁。
- 24) 「造られたるもの」著作集第15巻、24頁。
- 25) 「最も自然な生活」著作集第4巻『思想しつつ生活しつ
つ 下』、1928年(初出は1917年)、310頁。
- 26) 同上論文、310-311頁。
- 27) 「生命を与うるもの」『婦人之友』1922年1月号、9頁。
- 28) 「悲哀を知る人々」『婦人之友』1920年10月号、7-8頁。
- 29) 「夫婦生活の空虚」『婦人之友』1918年4月号、5-7頁。
- 30) 「我は葡萄の樹なんぢらは枝なり」『婦人之友』1926年6
月号、3-7頁。
- 31) 「思想しつつ生活しつつ祈りつつ」著作集第4巻、初出
は1927年、327頁。
- 32) 同上論文、325頁。
- 33) 「三つの活力」『婦人之友』1925年1月号、26頁。
- 34) 「活きた修身」著作集第11巻、初出は1927年、312頁。
- 35) 著作集第15巻、1-2頁。
- 36) 「悲哀を知る人々」、4-5頁。
- 37) 同上論文、5頁。
- 38) このほかにも、もと子は神を「万物の創造者」(「信仰の
対象」著作集第15巻、13頁)、「大いなる人格」(「神は法
則にあらず」同上書、39頁)などと表現した。
- 39) 羽仁恵子1972、66頁。
- 40) 「神は愛なり主義にあらず」『婦人之友』1932年2月号、
34頁。
- 41) 同上論文、39頁。
- 42) 同上論文、40頁。
- 43) 同上論文、34頁。
- 44) 「座談会 教育と変化しつつある社会」『婦人之友』1932
年6月号、96頁。
- 45) 「世界・文明及び自由を語る」『婦人之友』1933年9月号、
67頁。
- 46) 「座談会 世相を語る」『婦人之友』1936年7月号、48頁。
- 47) 「座談会 自由を語る」『婦人之友』1946年1月号、9頁。
- 48) 「教育上における自由と統一と権威と」『婦人之友』1937
年6月号、38頁。
- 49) 「たましいの教育」著作集第18巻『教育三十年』、執筆は
1932年2月、71-72頁。
- 50) 「座談会 暴力を研究的に観る」『婦人之友』1934年5月
号、60頁。
- 51) 「座談会 非常時世相批判」『婦人之友』1934年1月号、
98頁。
- 52) 「団体と個人について考える」『婦人之友』1937年8月
号、37頁。
- 53) 「それ自身一つの社会として生き成長しそうして働き
かけつつある学校」、44頁。
- 54) 同上論文、47頁。
- 55) 「座談会 暴力を研究的に観る」、62頁。